

9 体 育 科

佐藤直美・今村昌禎

1. 研究テーマについて

(1) 「自立に向かう子どもたち」の姿 <3つの『り』>

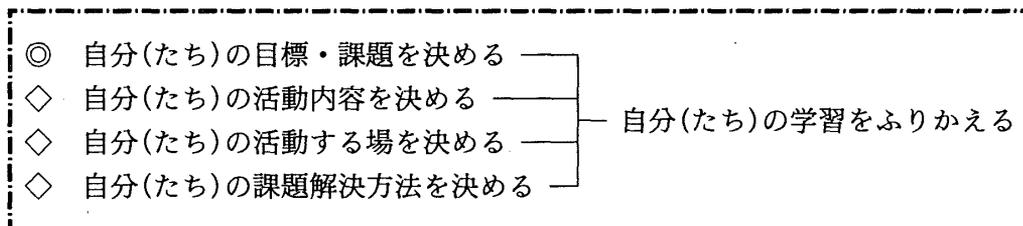
体育の授業や日々の生活の中で、自立していると考えられる子どもの姿を次のように想定した。

- ① 運動へのこだわり = 感性や情操を生かしながら、受け身ではなく、運動にこだわりをもつ
(=自主的な問題 解決能力) て (没頭して) 取り組み、主体的に課題を追究している姿。
- ② 友だちとのかかわり = 友だちの演技や動きに声援や励ましを送ったり、相手との話し合い
(=豊かな人間性) の中で、問題や課題を解決したりして、共に高まり合おうとしている姿。
- ③ 生活への広がり = 学習した事柄を生活スポーツとして、ふだんの暮らしの中に、積極的
(=たくましく生き するための健康や運動) に生かしている姿。

(2) サブテーマ「自分(たち)で決める場を大切に」のとらえ

「自分(たち)で決める」という言葉には、人任せではない、主体的に物事にかかわろうとする意味が含まれている。運動を手順どおり、指示どおりにこなして、ただ技術を身につけるだけでなく、自分(たち)なりに納得して手順を踏んだ取り組みを行ったり、自分(たち)の発想で運動にかかわったりしていくということが考えられる。

そこで、体育科の学習において、子どもが「自分(たち)で決める」場を次のように考えた。



※ これらの4つの自己決定の場をいつも学習課程の中に位置づけるというのではない。単元の特性や学年(運動経験)、個々の目標・課題のもち方によって、2つや3つの場合もあり得る。但し、このような自己決定を子ども自らが行っていくためには、どの運動にしる、自分のやりたいこと、達成したいことなど、すなわち目標・課題をはっきりともって運動に取り組む姿勢が大切である。そこで、「自分(たち)の目標・課題を決める」場を◎とした。

2. 基本的な考え方について

体育は、運動技術の習得や運動の楽しみ方を味わう上で、人間関係が大きく左右する教科である。グループやチームの人間関係によって、運動の特性に関係なく、好きになったり、嫌いになったりもする。つまり、肯定的にとらえると、運動を通して、より望ましい人間関係を築き上げることのできる教科であるといえる。また、生涯に渡って、運動・スポーツにかかわり、より豊かで健康的

な生活を築いていくための基礎を培うという社会的役割を担っている教科でもある。それを自負して教科学習にあたりたい。

(1) 運動・スポーツを通して豊かな人間性を育む

競争スポーツが生活文化として確立するには、相手を打ち負かすところに意味が置かれるのではなく、勝者も敗者も、強者も弱者も互いに認め合い、しかも、それぞれのよいところや個性を存分に発揮し、高め合うことの意味や価値をみんなに共有されることが必要であると考え。「人を思いやる気持ち」「互いを認め合う気持ち」を根底にした自己実現の在り方を追究していきたい。

(2) 運動の学び方の習得を図る

生涯体育・スポーツの実践力は、子どもが主体的に運動に取り組む中で育まれると考える。子どもがこだわりをもって運動に取り組む、実感を伴って納得するという過程が重視されるべきであろう。また、一人ひとりがこだわりをもって、取り組むためには、めあてが内発的に動機づけられる方が望ましい。学び方を習得していくことは、学んだことを生活に生かそうとする力として、必要ではないかと考える。

3. 授業づくりにおけるポイント

(1) 子どもの願い・欲求を満たす「運動との出会わせ方」

- ◇ 子どもの実態を把握し、子どもの願い・欲求を満たすという側面を大切にしながら、教師が教えたこと・気づかせたい価値に結びつけて、授業の方向づけを図る。
- ◇ 学習意欲の継続や学習の見通しをもつために、目標の明確化を図る。

(2) 自分なりに発展しやすい「学習課題の設定」

- ◇ 具体的な手だてが見つかる、達成の可能性がある自分なりの学習課題をつくることのできるように導く。(授業前・授業中)
- ◇ 自分の運動(学習課題)がどうだったか一つひとつ記録し、次のやりたい運動(学習課題)が見つかることができるようにする。

(3) 自己決定できる「場」や課題解決のための「活動時間の保障」

- ◇ 自分にとって、何が、どれが効果的なのか、自分のからだで試して納得する授業過程を設定する。
- ◇ ある程度運動のしくみやゲームの方法が分かったら、自分なりに考えた方法(運動づくり・ルールづくり)を試す場や課題解決のための時間を保障する。

(4) 学び合い、高まり合う「集団づくり」

- ◇ 学習材に応じたグループを組織したり、チームを編成したりする。
- ◇ 個のよさを認め合い、互いに思いやれる集団の雰囲気づくりに努める。

(5) 個人内の伸び、集団内のかかわりをみとる「評価」

- ◇ 「できばえ」に対する評価を「自己実現」という視点から行い、昨日の自分より今日の自分というように、個人の中での向上に喜びを感じることができるよう働きかけを行う。
- ◇ 集団(グループやチーム)内のかかわりが、成果としてみとれる評価を工夫する。

(6) 学習したことが生かされる「運動の生活化への導入」

- ◇ 学習したことが次のステップとしてどのように生かされるか明確化する。
- ◇ 学習したことが授業以外の場でも試したり、発展したりするような環境づくりをする。